
思い出の破片

妹明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出の破片

【Nコード】

N6868P

【作者名】

妹明

【あらすじ】

リア充のクリスマスの惚気になってしまったΣ

今立ってる自分は貴方にとって何ですか？

私にとってそれはガラスの破片。

そんな綺麗な物でもないけど

破片の一つ一つを地道にはめ込んで

死ぬ頃には綺麗にはまってるガラス細工が出来上がると思ってる。

それを私たちは

過去とか

自我って

呼んでいるんだと思ってる。

でもそれを貼り合わせるのりはとてもとれやすく

ちよっとした事ですぐに壊れて

破片一個一個に戻ってしまう…。

そうだと思う。

あまり綺麗でもないガラスの中でも

特別に輝いて見えるガラスの破片のうちの話を

ひとつだけ。

そう、時期は今頃。リア充どもがわさわさしてるこんな季節だ。

私もそのひとつだが、最大のリア充イベントに予定は入ってない。

あ、入ってたか。バイトが。

息を吐けば白くなるそんだけ寒い日。当然、ドアノブも氷みたいに

冷たくなってた。

でも開ければ、春みたいに暖かい室内がそこにあった。

「こんちわー」

「おう。ちわー」

バイト先の先輩は忙しそうに段ボールを片っ端から開けてる。部屋

中に音が響いてる。

「あー、その段ボール開けて」

「あ、はい」

ベリベリつと勢いよくガムテープを剥がす。中には赤い布に白い綿を縫い付けたような服が。

「サント服？」

「あれ？ 言ってなかったっけ？ それ着て売るってさ」

そう言くと、赤い服と帽子を投げつけてきて。

「と、言う訳でそれ着てね。よろしくー」

それだけ言つと、先輩は上から適当に赤服を着て店頭に向かった。私も更衣室にそれを持って中に入った。

早くしないと怒られるのでさっさと着替えて店頭へ小走りで向かう。

流石と言つべきだな。人が沢山いる。ギリギリ店内に入れるくらいの大人数だ。

「人気っすね」

「そりやこの時期に人入んなかったら、ココ潰れるし」

苦笑いしながら、ケーキを次々売りさばく。やっぱ、格が違うわ。ラッシュ時間にシフトを入れるんじゃないかと若干の後悔をしつつ、

入れては消え、入れては消えるを繰り返すケーキを売りさばき続けた。

と言つか、駅前にあつて全然売れないケーキ屋も珍しいと思う。

ラッシュ時間が過ぎ、人もあまり来なくなり店が閑散としたし、あと一時間でシフトが終わる頃。

「そういえばさ」

「はい？」

「まだ、重要なお客様が来てないんだよね」

「その人、予約してるんですか？ 特注のケーキ」

「んー。あつてるかな？ 一応」

「でも、もうそろそろ店仕舞いですしね。来ないとまずいですよね」
「そうなんだよ。早くしないと、渡せないよね？」

こちらを少し見て、ニコッと笑う先輩。訳も分らず、愛想笑いでその場を凌ぐ。

と、その時だった。店にある客が入ってきた。よく見覚えのある顔だ。

ほぼ毎日と言っているほど、よく見る顔。そうだよ。

「すみません、予約してた者ですけど。あります？」

「ありますよ。少々お待ち下さいー」

「……」

「……」

呆然とする。その人はバイト先にお客様としてやってきたんだ。

「お待たせしました。こちらでお間違いないですか？」

あえて、私に見せないようにそれを客に確認を取る。

「はい、合ってます」

カップケーキ一個を入れる用の箱に入った小さなケーキを見て、客は縦に頷く。

そして、先輩はそれを客に渡すことなく、私に手渡した。

「え……？」

「それ、君にだってさ」

随分と楽しそうに笑って先輩は言った。

「開けなよ」

客に言われるがまま、ゆっくりと箱を開ける。

そこには小さいケーキと、その一番上に刺さった輝く指輪が見えた。

それを見た瞬間に一気に視界が霞んだ。

「なに……、こんなの、聞いてないよー!!」

「驚かせようと思ったんだよ、ねー？」

客…彼に確認を取ろうとする。彼は恥ずかしそうにそっぽを向いた

まま、小さな声でおう。とだけ言った。

「とりあえずさ。前出て！」

背中を押してショーケースの前に私を立たせて、先輩は裏へと消えた。

「あの…。その」

「なあ！ 俺達、結婚しよ！！」

「！！」

「ダメ……か？」

「……ううん。ありがと」

この日埋め込まれた破片は

何よりも重要なピースで

私の人生でかなり大きく輝いている。

それだけ眩しい破片が一個でもあるなら

私はこの人生で後悔することなんて

一個もないなっ

その日、思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6868p/>

思い出の破片

2010年12月30日20時32分発行